

地域公共交通の再生

広島県立呉三津田高等学校

第3学年 市場 裕朗

地域公共交通の再生

広島県立呉三津田高等学校 3年 市場 裕朗

現代日本での最も大きな問題の一つが少子高齢化であることは疑いようがない。それに伴う人口減少は様々な場面において多大なる影響をもたらしている。地域公共交通の衰退もその1つだ。マイカー時代の到来と相俟って、地方部では次々と赤字路線が廃止されている。このままでは地域公共交通自体の存続も危ぶまれるだろう。では、行政はこの問題に対してどのような措置を図るべきだろうか。地域とより密接に関係しているバス路線を中心として考えていく。

そもそも地域公共交通はなぜ必要なのだろうか。国土交通省は地域公共交通に求められる役割として、地域住民の移動手段の確保、コンパクトシティの実現、「まち」のにぎわいの創出や健康増進、人の交流の活発化の4点を挙げている。こういったことからわかるように、地域公共交通は交通分野だけでなく「まちづくり」に大きく関係している。さらに視点を広げると観光や福祉、健康、教育、環境等にも影響を与えている。つまり、地域公共交通は地方活性化のために必要不可欠なファクターだと言えるのである。

さらに自分で自動車を運転することができず、交通手段がないため公共交通機関に頼らざるを得ない交通弱者の問題もある。この問題は高齢者に顕著であり、昨今の運転免許証返納の気運が拍車をかけている。もちろん、運転免許証を保持できない若年層も交通弱者である。また、運転免許証保持者であったとしても、車検時や大雨などの災害時に地域公共交通を使わざるを得ない状況になる可能性がある。これも潜在的な交通弱者として把握しておく必要があるだろう。このように、地域公共交通に頼った生活をしている人が多く

存在しているのである。

現在、行政がバス運行対策費補助金として行っている制度に地域間幹線系統確保維持費補助金がある。この制度はバス会社の赤字の一部（変動があるが大体40%前後）を国と県が半分ずつ補助するものである。自治体によってはこの制度に追加して補助金を出している所もある。しかし、これだけでは足りていないのが現状だ。

そこで私は、現行制度を新たに作り替えるべきだと考える。それは、インセンティブ報酬を導入したものである。インセンティブとは目標への意欲を高める刺激で、特に、企業で与える報奨金や奨励金のことを指す。つまり企業に一定のハードルを設け、それをクリアすると追加で報奨金を与える制度である。この制度のメリットは企業側の努力を促せる点にある。現行制度の問題点として、補助金を受け取れる安心感からか企業側が努力を怠り、結果としてサービスの低下を招いてしまうことがあった。だが、インセンティブ制度ならば、設けられたハードルをクリアするため企業が努力すると考えられる。実際、中国バスで行われたインセンティブを用いた事業再生は、成功を収めている。さらに、乗合乗客数が7.5%増加し、有責事故が93%、苦情が46%減少するなど、企業努力によるサービスの質の向上もみられた。このようにインセンティブを活用した制度は資金面とサービス面の両方で成果を上げることができる。

現在、日本の多くのバス会社が赤字による問題を抱えている。国も補助金による支援をしているが、不十分なケースが多く、問題の解決には至らない。バスを始めとする地域公共交通は国民の移動手段であると共に社会を形成する上で必要不可欠なファクターである。それを失うことは社会全体の衰退を意味していると言っても過言ではない。今こそ、この

問題に真剣に向き合うべきではないだろうか。

(1, 4 5 9字)

指導者の言葉

この作品は、本校の総合的な学習（GAYA）の時間で「日本は赤字バス路線を税金で補助すべきである。」という論題で、ディベートを行った事後指導として、小論文を執筆した際の作品です。

ディベートでは 自分の考えや主張を相手に正しく理解してもらえるようになる。相手の考えや主張を正しく聞き取り、理解できるようになる。

理論的に自分の主張の正当性を導き、反論を打ち破ることができる。これらを目指しました。そのためには、主観的ではなく、客観的な資料やデータを集めること、その資料やデータの中で、どの資料を用いて論を展開するか取捨選択すること、誰にでも分かりやすい言葉で表現をすることを重点的に指導しました。筆者の班の集めた資料は、厚さ4 cmにもなり、日本国憲法や会計検査院の資料、大学の論文などと多岐に渡るものでした。内容も非常に難しいものもありましたが、筆者は一つ一つを理解しました。また、自分とは立場の異なる反対派の生徒とも何度も話し合いを重ね、考えの幅を広げることができました。これらの活動を通して、小論文においても根拠に基づく主張ができたのだと感じています。

また、普段から身の回りの疑問に対してとことん調べる筆者の探究心と、日頃の授業を大切にし、着実に知識を身に付けている事、自分の興味・関心など様々な事に対して、ああでもない、こうでもない毎日議論をしている友人関係。そんな日常生活があることもこの小論文を書けた一つの要素かもしれません。